

またもみぢある山ざとにおとこきたり

やまととのもみぢみにとやおもふらんちりはて、こそどふべかりけれ、いとおほかれどか
かず、大饗の日、寛仁二年正月廿三日なり、ありさまいふもおろかにめでたし、尊者には閑院右大臣○公季おはしましける、うへ○頼通室の御ありさまなどいとあらまほしくめでたきとのなり、

〔小右記〕寛仁二年正月廿一日乙卯、大外記文義朝臣云、今日政始、攝政○藤原新調大饗料四尺倭繪屏風十二帖、被持參也。畫工織部佐親助、色希形有詩并和歌、今日各獻之。詩者大納言齊信、公任、式部大輔廣業、内藤權頭爲政、大内記義忠爲時法師、作和歌者齋主輔親、前大和守輔尹、左馬頭保昌、妻式部讀之、大納言公任卿遲參不出詩、太相府○父道長頻以被催、頗有興委之氣、慄立退、以右中弁定頼令書出、卿相數多會合、侍從中納言行成可書、拾遺云、不可書出、明後日大饗云々、兩納言詩不可評定、自餘可撰被相定間、下薦上達部各々分散、□主和歌明日可定云々、非儒者上薦公卿依下官命作屏風詩如何、不異凡人、就中公任卿故宮候周忌內有此興如何、

〔玉海〕嘉應三年正月十六日辛卯、自攝政基房○藤原御許、大饗日必可來、可彈琵琶之由被示送、脚氣逐日增、敢不能行步、仍其旨具申了立還、被示遺恨之由、十九日甲午、此日攝政太政大臣○基房朱器大饗也、三公皆有障、一人不行向、以左將軍師長○藤原爲上首云々、下官日來有其請、又存可參向之旨、而扶脚病、出仕之間、自去十四日殊增、更不能起居、仍今日不向、自他之遺恨、無物于取喻、今日事、右大辨俊經奉行、然而當日事光長行之云々、少將顯信朝臣取圓座、民部少輔宗雅取資、左少辨兼光召史生、鷹飼諸武、左將軍勸四獻之盃、其盃親範卿傳受也、納言爲上首之時、公卿傳盃事、先例可尋之、又馬一匹被引大將、此事豫被問人々、申旨不分明、而隆秀卿覺申永保例、塘河左大臣初任大饗、無大臣之客、因茲有此儀云々、

〔日本紀略一醍醐〕延喜四年正月四日、左大臣家時平○藤原